

かわさき

農家だより

発行 川崎市農業振興センター
〒213-0015
川崎市高津区梶ヶ谷 2 - 1 - 7
電話 044-860-2462
FAX 044-860-2464



★9月30日(土)川崎市畜産まつりが開催されました★

「畜産まつり」は市民の皆様には畜産を身近に感じていただき、畜産物の普及を図ることを目的として昭和57年から開催されています。当日の催し物として、市内で飼養されている家畜の展示、畜産共進会(鶏卵の部)、牛乳の試飲、卵のつかみどり、目方当てクイズ、ふれあい動物園などがあり、大勢の来場者でにぎわいました。



共進会鶏卵の部結果発表風景。「川崎市は消費者がすぐ近くにいるということもあり、質の高い鶏卵を生産している。」との講評をいただきました。



ふれあい動物園の風景



市内で飼養されている家畜が展示されました。「牛ってこんなに大きいんだね！」

～畜産共進会結果～

酪農の部(未経産)

金賞 箕輪健二(麻生区)

酪農の部(経産)

金賞 箕輪健二(麻生区)

銀賞 市川国光(麻生区)

銀賞 村野吉一(宮前区)

銀賞 福田 努(高津区)



*酪農の部は、9月11日(月)に農家巡回審査を実施し、決定しました。

鶏卵の部

金賞 河崎幸一(高津区)

銀賞 関 正義(多摩区)

銀賞 市川 進(麻生区)

銀賞 石川 廣(宮前区)

銀賞 河原彌兵衛(高津区)

銀賞 森 正(高津区)

銀賞 大木 豊(宮前区)

銀賞 小黒育平(高津区)



★川崎の畜産の現状について★

平成18年2月現在、川崎市内の畜産農家数と総飼養頭数は下表のとおりです。

飼育部門	平成18年2月		昭和60年2月	
	飼養戸数	総飼養頭数	飼養戸数	総飼養頭数
乳牛	5戸	95頭	12戸	169頭
肉牛	0戸	0頭	9戸	58頭
豚	2戸	470頭	50戸	4,608頭
鶏(採卵用)	8戸	18,252羽	55戸	149,870羽



都市化の影響などで乳牛・肉牛・養豚及び養鶏部門のすべてで、飼養戸数・総飼養頭羽数にかなりの減少がみられますが、大部分の畜産農家が住宅地に立地しており、エサ・飲み水や飼養環境等を工夫し、更には定期的な消毒を行い、臭いやハエなどができるだけ発生しないようにするなど、近隣に配慮した経営を心がけています。

【問い合わせ先 農業振興課営農係 860-2462】

～かわさき「農」の新生プラン推進会議～

川崎市では、かわさき「農」の新生プラン（川崎市農業振興計画、平成17年3月策定）に基づき新たな「農」の施策を検討するため、平成17年5月に同プラン推進会議を設置しました。昨年度は、地産地消をテーマに会議を4回開催し、次のことを提言としてまとめました。

南部地区で定期的な「かわさき農産物ふれあい市」の開催、農産物収穫体験めぐりなど、農イベントの充実を図ること。

J Aと連携し大型直売所の開設や既存直売所の充実を目指すこと。

自校献立方式の学校給食（月1回）にボランティア的に農産物供給に尽力している生産者が経営的に成り立つよう支援策が必要であること。

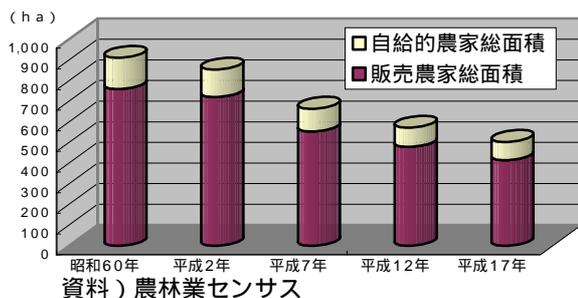
減農薬・減化学肥料栽培の普及や生ごみ堆肥の農業利用の可能性など、環境保全型農業を推進すること。

市では提言を踏まえ今後も、かわさき地産地消推進協議会（平成17年6月設置、直売会等の農業者、市場関係者、J A、関係行政機関で構成）と連携しながら、生産者と消費者との「顔が見え交流する関係」である地産地消を進めていきます。

麻生区黒川地区の農業振興策を検討しています。

市内の農地は、農家の兼業化、相続税制問題など厳しい営農状況の中でその減少に歯止めがかかっていません。

経営耕地面積の推移



とくに、麻生区黒川地区・岡上地区・早野地区は農業を振興すべき地域（農業振興地域指定）であり、農と緑の3大拠点として位置付けられた重要な地域です。今までは場、農道整備など土地改良事業を実施してきましたが、現在その活性化策が重要な課題となっています。

なかでも黒川地区では、平成12年より農道等の補完整備の実施、農学系大学の誘致、直売所の開設検討、援農ボランティア育成などの農業公

園づくり事業を進めてきました。

現在、農業公園の拠点機能を持つ大型直売所（事業主体：JA セレサ川崎）や明治大学実習農場の開設が予定されています。



推進会議では、今後、拠点施設を核として、どのような農業振興策が必要なのか検討しています。各委員からは色々な意見が出されていますが、何よりも地元農業者の方々の意向・提案等を踏まえた振興策であることが必要であると確認しているところです。

今後も推進会議を開催する中で地元の活性化につながる方策等を提言としてまとめることとしています。

検討内容及び議事録は農業振興センターのホームページ「かわさきの農業」にてご覧いただけます。

<http://www.city.kawasaki.jp/28/28nogyo/home/kaigi/kaigi.htm>（「かわさきの農業」で検索）

【問い合わせ先 農業振興課農政係 860-2462】

川崎農業振興地域整備計画変更案の縦覧について

この計画の変更案を公告の日から30日間縦覧しています。(農業振興地域の整備に関する法律第13条第4項において準用する第11条第1項)

川崎市の住民は縦覧期間満了の日までに意見書を提出することができます。(同法第11条第2項)

農用地区域内の土地所有者等は異議申立期間に異議を書面で申し立てることができます。(同法第11条第3項)

1 縦覧(閲覧)期間

平成18年11月10日(金)から12月11日(月)まで
8時30分から17時00分まで(閉庁日を除く。)

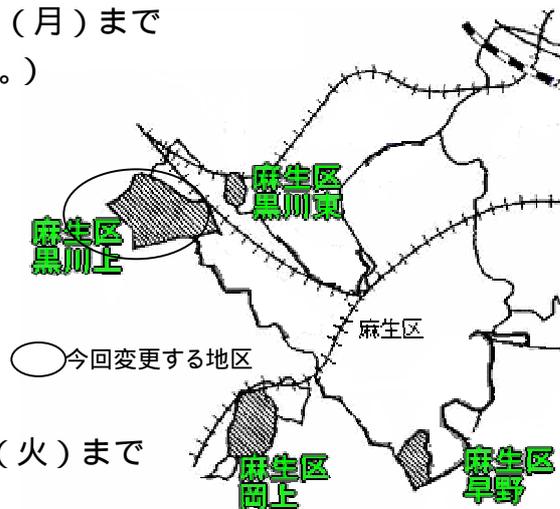
2 縦覧(閲覧)場所

縦覧 川崎市農業振興センター
高津区梶ヶ谷2丁目1-7
JAセレサ梶ヶ谷ビル2F

閲覧 麻生区総合庁舎<新百合ヶ丘駅北口駅前>
2階ロビー(副本を閲覧できます。)

3 異議申立期間

平成18年12月12日(火)から12月26日(火)まで
(郵送で提出することができます。)



【問い合わせ先 農地課審査係 860-2461】

遊休農地をなくしましょう

～農地の適正な管理をお願いします～

農地の遊休化は、雑木や雑草の繁茂により、病虫害発生のおそれが増えてしまうばかりでなく、火災発生の原因となるなど、周囲の方に迷惑をかけることとなります。また、生い茂った草木が見通しを悪くするため、産業廃棄物などの不法投棄を招くことにもなります。

遊休化した農地を耕作に適した状態に戻すには多くの時間、人手、費用が必要となります。地域にとっても大切な資源である農地の適正管理をお願いします。なお、農地の適正な管理方法などの御質問や御相談は、農業委員会にお問い合わせください。

【問い合わせ先 農業委員会 860-2461】

注意

農業委員会では、毎年農地パトロールを実施しております。遊休農地を発見した場合には、土地所有者に対し管理の指導を行っておりますが、なかなか解消されておられません。

平成17年9月に農業経営基盤強化促進法が改正され、土地所有者が農業委員会の指導に従わず、かつ、解消の緊急性を要する場合、市長が土地所有者に対して遊休農地を解消するよう命令できるようになりました。

また、その命令に従わない場合には、市長が土地所有者に代わって遊休農地を解消し、費用を徴収するなど厳しい措置がとられます。

農薬を正しく使用しましょう!!

農薬の種類と特徴を知ろう

- ・ 粒剤.....浸透性の強い農薬が多く、効果が長持ちする。値段は高いが、散布は簡単でドリフト（飛散）の心配もない。
- ・ 水和剤.....価格が安く、速効性がある。ただし、水に溶かした時に濃度ムラが出やすく、作物にも付着しづらい。
- ・ フロアブル剤.....水和剤の粒子を細かくして、水に溶けやすいように加工したもの。水和剤に比べ作物に汚れが付きにくい。
- ・ 乳剤.....安価で水に溶けやすく、時間が経っても薬剤が沈殿しない。ただし有機溶剤が含まれているため、薬害が出ることがある。
- ・ E W.....溶剤を加えず、農薬の有効成分を液体状の樹脂などで覆っているもので、乳剤のような薬害が出にくい。
- ・ マイクロカプセル剤.....農薬の有効成分を被覆したもので、ゆっくり溶け長時間効果が持続するが、速効性はない。値段も高価。

農薬を混用するときの注意点

混ぜる順番

展着剤 水和剤、乳剤 水和剤の順で混ぜます。乳剤を混用する時は展着剤は入れる必要はありません。

なぜ？

乳剤には有機溶剤（キシレンなど）や界面活性剤（例えば石けんと同じ役割）が含まれていて、水に溶けやすくなっています。有機溶剤は作物の病害虫防護壁となっているクチクラ層（植物表面を覆うワックス層）を溶かし抵抗力を弱めたり、葉緑素を破壊する作用があります。同じような効果を持つ展着剤を加えたり、乳剤同士を混用することで、乳化剤や溶剤の濃度が高まり薬害が出やすくなるので、このような使い方はしないようにしましょう。

混用すると効果が減ったり害が出やすくなる組み合わせ

- ・ 石灰などの入ったアルカリ性の薬剤と有機リン系・カーバメイト系・抗生物質剤
- ・ 銅剤と有機硫黄剤
- ・ 石灰硫黄合剤と銅水和剤

農薬散布の原則

ローテーション散布をこころがける

同じ系統の農薬を使い続けていると、耐菌性や耐虫性が出やすくなります。殺菌剤は予防剤を中心に散布を行い、耐性菌の出やすい治療剤はいざという時に使うようにしましょう。殺虫剤には多数の系統の薬剤がありますが、抵抗性害虫は年々増加しており、問題となっています。B T剤（生物農薬）、I G R（脱皮阻害剤）、フェロモン剤などを定期的に利用し、発生密度を低く保つようにしましょう。